

教育研究情報

佐賀県立教育研究所

2号

..... ◇もくじ ◇
年頭所感 (2)
佐賀県教育長 森一郎
真の個性教育について (1)
広島大学名誉教授 皇至道
数学的思考と法則の適用について (2)
所員 向井正之
学力を伸ばす要因 (4)
所員 酒見茂
ELECとOral Approach (6)
国見中学校教諭 金子義弘
歴代所長隨想
「二代目所長をひきついで」 (3)
第2代所長 熊谷初三
教育豆辞典 (5)
教育資料案内 (7)
教育内外通信 (6)
ところどころ (3)

真の個性教育について

広島大学名誉教授 皇至道

教育とは何であるか。根本的には現代人の教育に対する態度、教育観というものをもう一度考えなおす時が来ている。

この場合、いちばん大事なことは、個性を出発点として教育を考えることである。しかし、個性というものは仲々お互いにわかりにくいものであるが、生活中で浸透している。しかし、一度聞いただすと何であるかわからないようである。われわれは人間であるけれども人間一般ではありえない。個人が一つの個性的意味での人間である。しかし、考えてみてわからぬのは自分である。

個性は東洋にある伝統的な個性よりも、西洋的な「個の自覚」というものから出てきたことばである。語源的にはラテン語で「分ちがたい」「不可分の統一体」ということである。世俗的には他と異なるものを個性があるというが、変つていると個性的かというと必ずしもそうではない。人間でいちばん変つているのは気違いとかノイローゼの者であるが、彼らを個性的とはいわない。そこで変わっているという意味の個性は、価値において変わっているのである。したがつて偉大な芸術家、学者などは個性顕著といえるのである。

われわれは個性的に動いている。これはたえず選択決意を通つてきている。そこにひとりひとりの個性がでているわけである。したがつて人生はそういうものの集積である。われわれは毎日さりげなく自分で価値的なものを採択しながら、決意、行動しているから、いちいち重なることはないと思つてはいるが、この行動それ自身は常に大なり小なり価値を選択しながらきてるのである。そこにわれわれの個性は人格化されつつある。

個性は、常識的にわれわれの生活の反省としてみる自分の価値に関連をもつたひとつの特異なものが個性の中にあるといわれるが、価値に関連のある特異なるもの、これが個性的であるとは必ずしもそうではない。すなわち、価値の統一ということだけでは個性とはいえない。ショウウインドウのマネキンは美しいが個性があるとはいわない。彼に

は自分が美しいという自覚をもたないからである。つまり、個性の窮屈の問題としては個性が自覚性をもつてることである。つまり、自分が価値の統一体であるという自覚をもち、この価値を客觀的に実現していくという意味において個性があるのでないかと思うのである。

したがつて、自覚이라는ものは無限に続くものであり、もうこれで終りということはないといえる。自覚が続くということは、個性の発育が続くということである。人生が尊いという由縁はここにあると思う。しかし、人間が発展するというかぎり、そこに自覚がある。そこでは何らかの意味で危機をもつてゐる。発展するということは転落するという可能性をもつてゐるわけである。だからどのような老令になつても何らかの進歩をもなしうるけれども、何らかの善をもなしうるけれども、しかし、何らかの惡をもなす可能性をもつてゐる。惡をなす可能性をもつてゐるから善をもなしうるのである。

人間は終生自分を教育する努力が必要である。教育の本質はこの意味で自己教育であると思う。しかし終生努力してもはあくできないような個性を、われわれ教師が教育するということは不可能ではないか。しかし、個性はつかめないから教育ができるのである。

実際に教育する場合、教材と教科書にたよつてはいる。これは、人類のつくつた伝統的な既製の価値である。そして教えるということは結極、この中にある占められた価値を打診しているのである。つまり音楽とか数学とか理科のさまざまの価値をあてがつてみているわけである。これに対する生徒の反応をみているわけである。それは、人によつていろいろな在り方をするが、われわれがいわゆる勉強するということは、その意味で外から客觀的な価値をあてがつてみて内にある可能性を打診しているというが、ほんとうの個性の教育であると思うのである。

明けましておめでとうございます。
みなさまもごきげんよく新年を迎えられましたことと心からお喜び申しあげます。
ことしは明治百年を迎える、國をあげて清新強力な躍進にふみ出すべきときではないかと存じます。

私はかねて豊かな人間性をそだて、情操ゆたかで強健な身体と積極果敢の気象、旺盛な責任感と実践力をもつ人間資質を啓発してゆきたいものと念じておりますが、そのためには家庭・学校・社会が力を合わせてゆくことがたかいせつなことは言うまでもありません。

学校教育においては教師の良識と豊かな指導力によつて児童生徒の資質を存分に伸ばし、社会教育にあつては青少年育成のため健全な家庭づくりにつとめ、成人の自覚と責任ある行動によつて本県教育の水準を高めたいと念願しております。

このため何よりも肝要なことは指導者の指導力を充実してゆくことであると思います。この点これまで各方面にわたつて熱心に研究が積み重ねられてまいりましたことは、まさに喜ばしいことであります。特に教育研究の機関として、県立教育研究所の果たすべき役割りは、いよいよその重要性をましてきたものと考えます。

私は研究所がその設置のゆえんに即し、研究の領域や内容を充実して、当面する本県教育の具体的問題について適切かつ効果的な研究を深めその成果が教育の現場に浸透してゆくことを念じてやみません。

その意味で、本所報がじゅうぶんその機能を發揮することができますよう各位のご協力をお願いし、年頭のご挨拶をいたします。

昭和43年1月1日

年頭所感

佐賀県教育長

森 一郎

数学的思考と法則の適用について

所員 向井 正之

1 数学的な思考について

算数、数学に限らず、基本的なことからを一般化して、抽象的なことばでまとめておくと、それは彈力があり、その応用の範囲も広い。数学（算数、数学とわけて使われているが、この小論では便宜上両者をひとまとめにして「数学」とよぶことにする）において、一般化、抽象化して、ことばや記号であらわされた基本的な法則、公式等はその代表的なものといえよう。数学は、この抽象化され一般化された基本的な法則を適用して、系統的に、累積的に展開されていくものである。このことを具体的な例によつて考えてみよう。

加法の場合に、その筆算の原理は、10この数を用いて、どんな数もあらわすことのできる、記數法の原理を用いて展開される計算の方法である。したがつて「各位の数字をそろえて書き、同じ位どうしを加える」という一般化された基本的事項が理解され、さらに基礎的な計算が、練習（訓練）されると（2位数）+（2位数）でも（4位数）+（2位数）でも理解されていくのである。これは一例であるが、要するに数学は、或具体的な問題を法則や原理を使って問題を解決し、また、それを一般化して抽象的なことばで表現された法則にまとめる。そして上のようにして学習される過程において思考力も養っていくものである。その間のいろいろの思考が数学的な思考だとよんでいる人もある。

それで、問題が解決されてくる結果も、もちろんたいせつであるが、それまでの思考の過程というものが、きわめて重要である。

2 多様的な思考

今まで、抽象化された法則を使って問題を解いていく過程がくりかえされていくことによつて、数学的な思考力もつかわしていくということを述べたが、その間においてむつかしい問題の場合は、（文章題はもちろん、図形、計算、その他）いろいろな考え方をして解決しようとする。いわゆる多様的な思考がなされなければならない。もちろんいろいろな法則を使つての思考である。この多様性をおびた思考といいうものは思考力の向上にたいへん重要なことであろう。したがつて教具というものは理解を助けるための手段として使用するものであり、教具の使用そのものが目的でないことをはつきり認識しておらねばならない。これはわかりきつたことであるが、ややともすると本末転倒したことになる場合も出てくる。

3 素朴な基本的原則適用の一例

先年、「小学校における求積（面積）指導」ということについて、小学校4年生を対象にいろいろ調査した際に、

1 長方形の面積を求める公式を書きなさいという問題では

〔正答率〕 90%

2 たてが5cm、横が9cmの長方形の面積を求めなさい。という問題では

〔正答率〕 46.2%

〔誤答例〕

$$\circ 5 \times 9 = 45m$$

$$\circ 5m \times 9m = 45m$$

$\circ 5m \times 9m = 45m^2$ (これは(量) × (量)で一般的にあやまりとは言えないかも知れないが(量) × (量)という、ことは指導していないので、あやまりとした。)

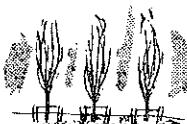
。その他、。全々解答していないもの
(資料は簡略にしてかかげる)

上の二つの問題について、考察、検討を加えるならいろいろの問題点があるのであるが、本テーマの性質上からして、それらは省略し、1と2において正答率に大きな開きがあるのはなぜか、ということをいろいろ検討した結果、面積を求める公式を導く際に、二つの長方形の広さを比較することから出発するわけであるが、その際「基準となる適当な広さのものを設定し、その何倍にあたるか」ということを比較することによりその大小がわかる」この素朴な基本的事項から指導し、さらにどこにでも通用するような共通な単位である 1cm^2 や 1m^2 等を基準量として、それを測定しようとする長方形に、しきつめていつて広さを測定するというように指導して、その意味をじゅうぶんに理解してから一般化された公式に導いたほうが、あやまりが少ないとおもふ。これが基本的、原則的なものにのって考えることが、数学的であり、理解も容易であるという一つの例であろう。

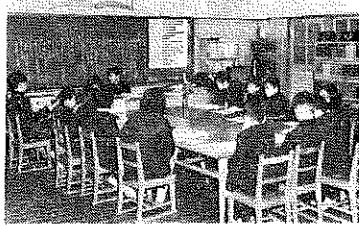
4 おわりに

二、三年前、全九州数学教育研究大会が、北九州市で開催された際の東京教育大学、和田義信先生の講演の中のひとつのことばを紹介しよう。

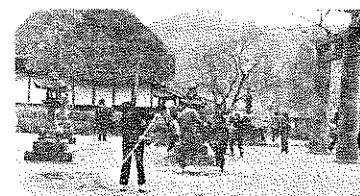
「数学ではより一般化してまとめたことばをだいじにすることが必要である」ということを強調された、すなわち抽象化された基本的な法則というものがきわめてたいせつであるということであろう。



子どもの自発的・自治的活動の芽を育てるため、昭和40年度から特別教育活動にとり組んでいる。



とくに40・鳥栖北小の放送部の活動
41年度は学級会活動、42年度は学級における係活動と児童会活動における部の自主的・自発的活動の育成に力を入れて、これを学校経営の中心としている。



富士町麻那古（まなご）子どもクラブは、昭和35年に結成、100人（6班）の会員が毎月の反省や奉仕活動、

麻那古子どもクラブの奉仕活動
レクレーションなどをつづけている。
部落ぐるみの態勢で支援、毎日曜日の駆足には父兄も参加し、親と子が一休となつた美しい状景である。
42年県と毎日新聞社から表彰された。



二代目所長をひきついで

第二代所長 熊谷 初三

こと誠に今昔の感に堪えない。

そもそも教育研究所の必要性を最初に痛感したのは現場の教職員であつた。終戦直後の学校教育においては「何をどう教えるか」は当時全く現場教師の自由に任せられたかつこうであつたから、教師たるもののが責任がにわかに重大となり、ここに「研究なくして教育はない」という時代となつたのである。ここに至つて教育研究所の研究資料なり成果が高く評価され期待されるに至つたのであり、この意味から、まさに教育研究所は教育現場の要請によつて誕生したというべきであつて将来とも教育学と教育実践との中間的存在として、益々規模を大きくし拡大充実さるべきであることを思い大いにその前途を期待しているものである。

(筆者は現在受験研究会の会長であられる。)

教育研究所は、民主主義教育が産んだ申し子である。終戦後、雨後の筈のように全国都道府県や大、中、小都市が競つて開設し僅か一両年の間に250を数え、今日では300を越えているといふ。

わが佐賀県では昭和27年に納富善六先生（初代所長）のお骨折りで孤々の声をあげたが、何しろ当時県財政は苦境のどん底にあり、中には折角悩みぬいて生れ出た嬰児を圧しつぶそうという形勢も出たほどで所員一同心を痛めたことであつた。あるときは私が全国連盟の研究集会に出席していたところを雲行き危うしとみて電報でよび戻されたことさえあつた。

しかしその後しだいに教育研究所の存在価値が漸々と認識されるようになり以来半をかさねて今や満15歳、ようやく青年前期に入つて見ちがえるほどたくましくなつて來た

一 学力を伸ばす要因 = 学習への適応性

所員 酒 見 茂

個々の子どもは知能に応じた学力をあげられるはずであるが、期待される学力より劣るとき学業不振といい、学習不適応と考えられる。その主体的要因として、身体の障害、性格の欠陥、経験の不足、学習習慣の不適切等が、環境的要因として、学校・家庭の障害、地域社会の不良等が考えられる。学習指導においては、学習不適応の要因をとり除き、知能相応あるいはそれ以上の学習効果をあげるように指導することが必要である。小学校5、6年の児童130名を対象に、教研式知能検査、標準学力検査、学習適応性検査を実施して、能力以上に学力のある子どもと、学力が知能におよばない子どもを比較検討して、学業不振の要因の一端を考察したい。

I 知能と学力の関係

子ども個人を知能と学力の両面からみると、右上の表のとおりである。

偏差段階別分布によつて、知能と学力の関係をおおよそ知ることができるが、それをもっと正確にみるのが新成就値である。知能偏差値から、知能対応学力偏差値を引いた値であつて、学力<知能の場合は負数となって学習効果があがっていないことを意味し、-7以下は特に学業不振児で指導を要する。この表から、およそ20%前後の子どもが学業不振児であると考えられる。

学習適応性検査診断プロフィール

領域	下位テスト	ね ら い	上位群 下位群 比較		+群 一群 比較
			○	○	
I 学習態度	1 勉強の意欲	自分からやる気をだし、進んで勉強しているかを見る。	○	○	
	2 勉強の計画	計画的に勉強しているかを見る。	○	○	
	3 授業のうけ方	積極的に授業をうけ、それを生かすようにしているかを見る。	○	○	
II 学習技術	4 本の読み方ノートのとり方	能率的に本を読み、ノートを活用しているかを見る。			
	5 覚え方 考え方	じょうずな覚え方、考え方をしているかを見る。	○	○	
	6 テストのうけ方	テストをじょうずにうけ、それを学力増進に役立てているかを見る。	○		
III 学習環境	7 家庭の環境(物的)	家庭の物的環境を活用しているかを見る。	○	○	
	8 家庭の環境(心理的)	家庭の雰囲気を勉強に役立てているかを見る。	○		
	9 学校の環境	学校の環境を積極的に活用しようとしているかを見る。	○		
IV 精神身体の健康	10 友人関係	勉強に望ましい友人関係であるかを見る。	○	○	
	11 自主的態度	自分のことは積極的に自分でするかを見る。	○	○	
	12 不安傾向	不安が大きいかどうかを見る。	○	○	
	13 神経質の微候	神経過敏の程度を見る。			
	14 身体的健康	身体が健康であるかどうかを見る。			

知能	学力					偏 差 値 段 階 (入員)			新成就値 -7(-6+7) 以下(+6)以上
	1	2	3	4	5	計	%		
偏 差 値	5	4	3	2	1	1	0.8	1	
段 階	12	33	5	3	8	28	21.5	22	4
計	46	46	22	11	1	130	/	37	4
%	10.8	35.4	35.4	16.9	1.5	/	100.0	96	9

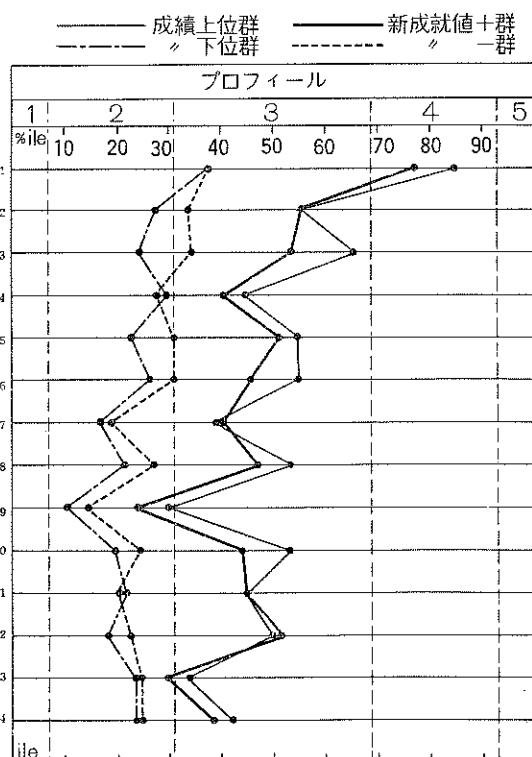
注 学力偏差値は国、社、算、理の4教科の平均点の偏差値である。

II 学習適応性検査にみられる学業不振児の傾向

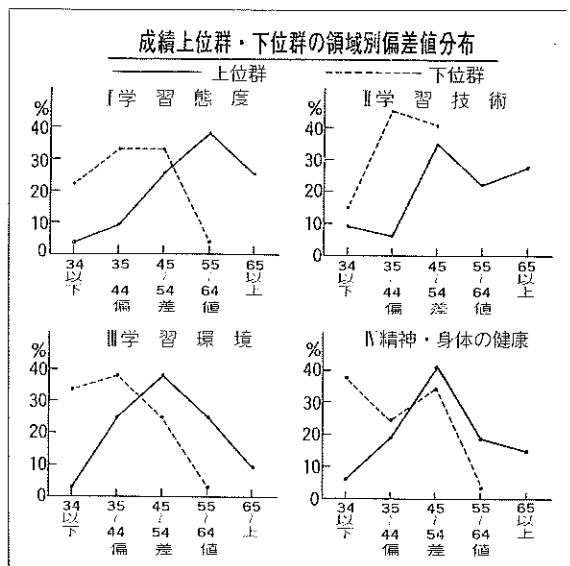
成績上位群と下位群、および標準学力検査の新成就値十群と一群とは、下位テスト14項目について、それぞれどのような状態であるか、またどのような差異がみられるか、その全体的傾向を示したのが下の図表である。

1 下位テストにみられる全体的傾向

下位テストをおしなべてみると、上位群、十群はおおむね3の段階に、下位群、一群は2の段階に属し、両者のあいだには3項目を除いて有意差があり、全体的に後者のほうが適応が劣っていることがわかる。学業不振児のほうは、正常群より、学習態度の面では、とくに、勉強の意欲、授業のうけ方が劣り、また学習環境の面では家庭の環境(物的、心理的)、友人関係がよくない。学習技術の面では覚え方考え方、精神、身体の健康の面では自主的態度、不安傾向など、



成績上位、下位群および新成就値十群の各群別の平均得点、標準偏差を算出し、両群の平均の差に有意差があるかどうかを、検定した結果、○印は1%以内、○印は5%水準で有意差のあることを示している。



学習場面への適応が好ましくない傾向にあるといえる。

2 領域別にみられる傾向

成績上位群と上位群の領域別の得点を偏差値に換算し、その分布を示したのが上図である。いずれの領域においても、上位群は偏差値の高いほうを、下位群は低い方を頂点とした分布で、下位群（学業不振）のほうが、学習場面への適応が好ましくない傾向を示していることがわかる。

3 学業正常群と不振群にみられる適応性の傾向

（新成績の十群を正常群、一群を不振群ということにする）

（1）学習態度にあらわれた傾向

勉強の意欲	内 容		正常	不振
	%	%		
自分から進んで勉強する	37.8	8.0		
すぐいやになることはない	85.6	20.0		
嫌いな科目はしようと努める	31.1	18.7		
ぼんやり時間をつぶさない	35.6	10.7		

学習への積極性や熱中の度合いや努力などについて、はつきり差が認められる。勉強の意欲をひきおこすような指導、すなわち、手近な目標をたてさせ、得意とする好きなものから始めさせ、統いて不得意なもの、むずかしいものにと進ませる。学習結果を早く知らせること。適度にほめたり競争させたり、勉強に変化をもたせることなど、不振群の指導にはとくに必要と考えられる。

授業の受け方	内 容		正常	不振
	%	%		
程度が高いとは思わない	33.3	12.0		
いつも予習をしていく	28.9	2.7		
宿題はまつききにする	68.9	40.0		
進んで質問する	17.8	9.3		

不振群は授業に対して積極的な意欲がない。授業をじゅうぶん活かすためには、予習を必ずすること、復習を早くすること。発言力をつけること（予習、自信をもつ）などの指導が必要である。

（2）学習環境にあらわれた傾向

教師が自分で問題をつくつて、学期末、学年末に実施する教師作成の学力検査では、その結果によつて、学級内、同一学年内でならば、個々の児童、生徒の成績や能力を他の児童生徒と比較することができるが、その府県の水準、あるいは日本全国の水準と比較して、個々の児童、生徒や学級がすぐれているのか、普通なのか、劣っているのかをみることはできない。しかしながら、児童、生徒の学力や教師自身の指導法は、つねに全国的な観点からみておく必要がある。このように全国という観点から個々の児童、生徒や学級や学校

の学力の位置を知るために、学力という評価目標に対して、じゅうぶん妥当性と信頼性のある問題、実施法採用法を定め、それを全国を代表する児童、生徒に実施し、その結果で基準を作成し、この基準にてらして判定するほかに方法はない。

このように標準化された学力検査を標準学力検査という。さてこのような標準検査のねらいは、児童、生徒のもつ特性を測定して、それによつて個々に適した指導をするためである。つまり標準検査は、個人あるいは集団の特性を正しくはあくし評価するためのものであつて人間の価値づけをするものではない。庶民づけや競争のために使用すれば、かえつて劣等感やいたずらな優越感を起こさせるなどの弊害になることが多い。

教育
立辞典

標準学力検査

家庭の環境	内 容		正常	不振
	%	%		
ほめたりはげましたりする	46.7	33.3		
家のことで心配はない	57.8	38.7		
友だちを喜んで迎えてくれる	37.8	20.0		
言い争いをすることはない	44.4	37.3		

家庭のふんい気、しつけ方は、子どもの性格形成に影響し、この性格が日常の学習活動に影響する。家族の人間関係を円満にし、生活を楽しくすることがだいじである。

学校の環境	内 容		正常	不振
	%	%		
学校へ行くのがたいへん楽しい	24.4	20.0		
先生にきらわれているとは思わない	44.4	24.0		
先生がきらいで勉強がいやにはならない	55.6	33.3		
授業中、先生になにかいわれそうで、おちつかないことはない	37.8	17.3		
教室のふんいきが楽しく勉強がおもしろい	37.8	30.7		

先生は最大の学習環境である。学校に楽しい印象をもたらすようになることが大切である。先生が生徒を理解するほど、先生に対する子どもの態度もよくなるだろうし、先生に対する好意的態度が、やがては学業成績に好結果をもたらすものと思われる。

Ⅲ むすび

学業不振の原因が、本人の勉強の意欲、態度にあるのか、勉強の習慣や技術にあるのか、学校や家庭の環境にあるのか本人の精神、身体の健康にあるのかなどを診断しつづめて、学習場面にうまく適応していくように指導し、子どもひとりひとりのもつている能力に応じた、さらには能力以上の学習効果をおさめることができることを期待したい。

ELECとOral Approach

伊万里市国見中学校教諭 金子 義弘

1967年度秋学期ELEC奨学生として3ヶ月間の研修に参加した。場所は財団法人英語教育協議会ELEC英語研修所である。例年宮崎県えびの高原での夏期研修会を後援しているので、すでによく知られていると思うが、簡単に紹介しておきたい。

第2次世界大戦後、産業、経済、政治、科学、文化の急速な発達に伴い、国際間の提携交流が盛んになつてきた。そこで国際共通語としての性格をおびてきた英語の運用力を身につけた人材が強く要求されるにいたつた。そうした時代的、社会的要求にこたえるには、従来の翻訳を中心とした英語教授法を改めなければならない。そうした状況のもとに、昭和31年、日本英語教育研究委員会(英語名The English Language Exploratory Committee略称ELEC)が設立された。昭和38年にはこれが改組されて、財団法人英語教育協議会(英語名The English Language Education Council, Inc.略称は同じくELEC)となつた。

その諸事業のうち、研修会の分野を行なつているのがELEC英語研修所である。現職英語科教員のみならず、一般人に対しても、常時研修が行なわれている。研修生の数も千人を越えている。講師陣は、日本人講師の他、30名を越える外人講師をおいている。

本科教員コースの教科は次の通りであつた。

- 1 技能分野……会話、発音、ノートの取り方、新聞の読み方、作文
- 2 専門分野……言語学、文化社会的背景、教授法、授業実習、特別講演

ただし、春学期とかなり変つており、今後もいくらか変っていくと思われる。

ELECの英語教授法はすでによく知られている通りオーラル・アプローチである。私は自分のこれまでの授業を振り返つてみると、教科書を終ることで精一杯であつたと思う。その結果は新教材を理解させるのに一生懸命で、ドリルまでやれない。ドリルの必要性はわかつておりながら、50分という限られた時間内では、どうしてもドリルの時間を見出せず頭をいためてきた。オーラル・アプローチはそうしたドリルを重視するところから、自分の暗中模索の中に一点の光を投じてくれたよう思う。

オーラル・アプローチでは、一貫して言語の本質は音声にあるとみる。言語指導は、その言語の言語習慣を身につけさせることで、文法や訳読法を指導することではない。言語習慣にはhearing, speaking, reading, writing, の4技能が含まれている。これら4技能を心理的に分析して、Palmerは次のように説明する。

Hearing Audition (聴取) → Acoustic image (聴覚心象) → Concept (概念)

Speaking Concept → Acoustic image → Phonation (発音)
Reading Vision (目撃) → Graphic image (文字心象)

→ Acoustic image → Concept

Writing Concept → Acoustic image → Graphic image
→ Graphation (書写)

これらの心理的過程の中で、4技能いずれにも共通してある聴覚心象を重視することはいうまでもない。そこで英語の聴覚心象を植えつけない、つまり、音としての英語をしつかり記憶させない英語教育は役に立たないのである。文法や訳読中心の指導だけでは、この聴覚心象に直接結びつかないから、本当の英語の力はつかない。

教育研究所の全国組織

第2次大戦後、わが国における教育研究機関の設立は目ざましいものがあり、国立教育研究所をはじめとして、都道府県立、市町村立、大学や法人付設のものなどを合わせると、総数では約300と見込まれている。

平塚国立教育研究所長によれば、教育爆発の時代と言われる今日、西欧各国とも研究所の内容整備には格段の努力を払い、最近数年で2~3倍に拡充されているといふ。

わが国は研究所の数では世界一であるが、規模の貧弱なものが多い弱点がある。しかし、国立や大学の研究所では基礎研究を推し進め、その他は所轄地区内で、理論と実践の密着した研究を行なう点で、相互の有機的運用に妙味を期待したい。

連絡機関と、その主な事業内容は次のとおりである。

- A 全国教育研究所連盟(全教連) ……加盟164機関
• 全国共同研究「家庭と子ども」「学習指導の近代化」

の2部門があり、当所も両部門に参加している。

- 研究協議会 「特殊教育」「観察課程」「教育相談」「学校・学級経営」の4部会があり、関連の研究担当者が参考して研究討議をする。

• 研究発表大会 43年度は、5月下旬長崎市で開催される。

• 研究論文募集 43年度の主題は「生活指導の実際」

• 年報および研究報告集等の編集と刊行

B 九州地区教育研究所連盟(九教連) ……沖縄を含む21機関、全教連のブロック組織で、相互研修、研究連絡、情報交換等を行なう。43年の研究発表会は10月熊本市で開催。

C 都道府県指定都市教育研究所長協議会…加盟50人

次の5研究部会を組織し、事業運営の情報交換…標準案の作成等、研究所運営上の参考資料を提供する。

- ①研修事業 ②調査研究 ③教育相談・教育資料その他の普及事業 ④教育史編さん ⑤教育課程特別部会



それでは、聽覚心象を強く植えつけるにはどうすればよいか。そのためには、英文ができるだけ多く正しく暗誦させる以外に方法はない。したがつて暗誦のない英語指導は無意味である。結局英語教育のポイントは、英語を暗誦させることである。そしてまた、そのことが、英語指導の出発点となるよう思う。

このようにオーラル・アプローチは、音としての英語を暗誦させることを重視するので、口頭によるパターンプラクティスが授業の中心となる。生徒が授業時間内で鉛筆を持つて書くのは、復習最後の written test の時だけである。このために、writing の指導を無視しているというような批判がよくなされる。私自身そういう感じを持つていた。しかし私の授業を振り返つてみて、書かせる時間はなかなか見い出し得ないのが事実であった。そこで、4技能のうち、hearing, speaking, reading は教師が直接指導すべきこと。writing は生徒自身すべきこと。このように割り切つて考え、writing は家庭学習にゆだねてきた。ところがはからずも、ELE

Cの考え方と同じであつた。

文字指導については、活字体は識別できればよい。筆記体は書けるように指導しなければならない。したがつて、1年生の1学期始めから、筆記体の書き方を少しづつ導入していくべきだと考え方である。この点については私自身、指導経験がないので、活字体から導入して筆記体へはいる場合と、どちらがより効果があるか、今後の実践に待たなければならないと思う。

以上、オーラル、アプローチについて簡単に特徴を述べてみたが、英語指導の初期段階に適した指導法ではないかと思う。したがつて、中学校英語には、適当であろう。高等学校では、相当変化せざるを得まい。

最後に、英語英文学のすぐれた先生方に直接、お話を伺ったこと、経験的に知つたことが、理論的にうらづけされたことなど、有意義であつた。なお、今後、教育実践をおしてこれらの理論をうらづけてゆきたい。

当所には、教育研究用として専門図書約1,400冊、および研究紀要約3,700冊、(主に全国教育研究所交換分)を備えて*



* おります。学校教育、社会教育に携わられる方々の研究の便宜をはかつて貸出しもいたしておりますのでご利用ください。

○国際数学教育調査 (IEA日本国内委員会報告書)

S. 42.9 国立教育研究所

昭和39年に実施された、国際数学教育調査の結果の報告書で、日本、アメリカ、フランス等、12か国の参加を得て実施されたものである。その結果が、42年3月発表されたが、それを日本の国立教育研究所が国内向けにまとめたのが、この報告書である。日本の子どもの数学の学力が高いということで新聞等でいろいろ取りざたされた。274ページにわたる報告書であるが、参考になる点も多いと思われる。一読をおすすめしたい。

○長崎県教育研究 S. 42年12月号 長崎県教育研究所

毎月発行されている冊子で、12月号は「スキルとドリル」「国語教育座談会」をテーマにして編集されている。目次を簡単に紹介しておこう。

- 国語学習はこれでよいか。
- 社会科の基礎的技能
- 算数科における基礎的技能
- 理科における基礎的技能
- 話し合いのドリル
- 漢字の書写力と活用力を伸ばす指導法
- 算数科におけるドリル
- 理科の自作教具
- 条約と憲法、および裁判所の審査権について
- 第12回学研教育賞受賞者の紹介
- その他隨筆が三題出ている。

○子どもの自主性に関する研究

S. 42.5 京都市教育研究所

この調査の目的について、本書の巻頭に次のように述べてある。「いわゆる自主性について、これに含まれる3つの内

容、すなわち、自律、独立性、自發、積極性、創造、価値実現について、それぞれ4つ、計12の観点を設定し、これについて、子どもの意識、態度、実践の3つの側面の実態を把握し、さらに自主性が促進される条件、阻害される条件を発明しようとする。これにより、小中学生の自主性の伸長に関する問題点を明らかにすることによつて、生活指導上の一資料を得ようとしたものである」と述べてある。

綿密な実態調査により考察を加えてあり、生活指導、学習指導の参考になる点が多い。

○小中学校、算数数学科「関数」についての

学習系列の研究 S. 42.5 京都市教育研究所

現在の実習内容の指導によって、関数的な見方、考え方は学年の進むにつれてどのように深まつていくが、特に小中学校を一貫して関数指導の体系を考えいく場合に、小学校と中学校の間にどのような問題が存在するかを、調査問題に研究考察を加えてある。

○小中学校における電磁器教材の発展的

系統とその指導 S. 42 岩見沢市教育研究所

内容は最初に「理論編」にはじまり理科教育のねらいは何から始り、つぎに「系統編」で、電磁気教材の発展的系統等について述べ、最後に「実践編」として各学年とも一単元選んで実際に指導し、その指導案例、及びその反省や、授業の記録も、詳略に記してある。

○研究報告集

S. 42.12 尼崎市教育研究所

理科教育に関する報告集であり、各種の教材内容について6名の教育研究員の論文をまとめてある。

○研究紀要

S. 42.11 長崎市教育研究所

内容が次の四教科に分かれている。

- 算数
- 数学科における読みの実態とその問題点
- 社会科における地理的分野の指導
- 「テレビ理科教室5年生」を利用して。
- 文学教材の最初の読みの姿。

上の教科について、実態調査による分析検討や、授業案の例をかかげたりして、いろいろの角度から問題点を追求している。

○授業の改善 [実践編] S.42.5 長崎県教育研究所

小・中学校を対象にして、国語、社会、算数、数学、道徳について、指導上の問題点や、指導案例、授業の反省等、を述べてあり、実際の授業をとおして、個別化の理論と方法を具体的に確かめた、研究報告書である。

○現代の子どもーその生活と意識 (昭42.12)

全国教育研究所連盟委員長 平塚 益徳

本書は「現代の子どもの理解と指導」に関する、全国教育研究所連盟の3か年にわたる共同研究の成果をまとめたものである。ぬまぐるしく変転する現代の社会で、子どもはどのような意識をもつて、どのように生活しているか、子どものものの見方、考え方がどのような傾向をもつているか、その実態を明らかにして、現代の子どもを理解し、彼らの學習、生活、意識、進路などに対する指導の適切を期するうえに最良の書である。

○道徳教育事典 (昭41.10第9版発行) 第一法規出版社

大学教授その他39名の執筆者により、教育学的、心理学的、社会学的立場から、現場における道徳教育の諸問題を解説した事典である。小中学校の教師が心得ていなければならぬ、道徳教育について最も新しい知識、技術ならびに思想を収録し、今日的課題のすべてについてこたえており、道徳教育における現場教師の要求を十分に考慮し、毎日の道徳の授業ならびに指導にすぐ活用できる事典である。

○現場のための教育研究法 (昭42.7) 新光閣書店

愛知県教育研究所長 小野寺明男

教育現場において、実践的研究に役立てることを第一義的



昭和43年の夜
明けのよき日に
所報第2号を
お届けいたします。

巻頭には広島大学名誉教授の皇至道先生の「現代教育の課題」と題するご講演を引用させてもらいました。

歴代所長隨想には第2代目の熊谷初三先生に教育研究所の存在意義について筆を起していただきました。

また、国見中学校の金子義弘先生から、ELECとOral Approachなる寄稿もございました。

酒見所員の学力要因に関する調査研究は最新の資料として興味深いものがあります。なおこれの中学校、高等学校に関する調査研究をも研究所で取組んでいます。

また、「紙上教育相談」「読者の廣場」などを設けたいと思いますので、諸氏の教育論文や文芸、相談ごとなどをふるつてご投稿ください。

ともかく、当教育研究所と教育実践の場とが連絡を密にし、これが連係を強めることにこの所報が役立ちたいものと念じています。この所報についてのご感想、ご意見をおきかせください。

教師のたわごと

人間形成について

学校教育のねらいが、人間形成にあるということは、今さら論ずるまでもない自明の理であるが、ここで真正面から、「人間形成」について論を展開しようというものではない。先頃神戸市で、大阪大学教授、森昭先生の「現代日本教育の課題」という講演を聞く機会を得たので、その講演内容の一こまを紹介したいと思う。

最近長野県の或小学校で、サラリーマン家庭の子どもでどのような生活がとられているかを調査したところ、1勉強、2おけいこ、3テレビの順であつた。いずれも身体を動かさないものである。昔は、1遊び2勉強3手つだいであつた。という話をされた。

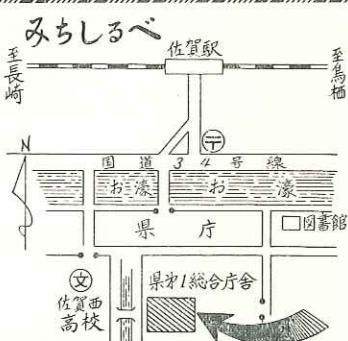
勿論、これは長野県の一小学校で、しかもサラリーマン家庭と限定されているのであるが、全国的にみても、都市でも農村等でも大なり小なりこのような傾向ではなかろうか。これにはいろいろな問題点もあり、今ただちに前者と後者を比較してその良否を論ずるわけにもいかないが、人間形成のある一面からみた場合に考えさせられることではなかろうか。

に考え、①教育研究のための必要な基礎的な方法を、具体的に例示し、②体系的に、きわめてわかりやすく記述され、③今日的課題を豊富な実例によりくわしく説明し、④教育研究を科学性のあるものにすることに配慮されている。

○教育評価の技術 (昭42.7) 日本図書文化協会

東京教育大教授 橋本重治、柳原清

本書の前編では、教師自作のテストの問題のつくり方や行ない方を解説し、後編では、学力、知能、適性、性格、行動および道徳性についての、いわゆる標準テストの見方、選び方、正しい用い方を取り扱っている。



第 2 号

発行年月日 昭和43年1月1日

編集・発行 佐賀県立教育研究所
佐賀市城内1丁目6-5
TEL ④2111 内線437

印 刷 佐賀県印刷局